風俗文選犬註解

序
列傳

へ5
5639
1

歌
立
函 土
冊
號
函へ5
號 5639
卷 1

五老井許六先生著
風俗文選大註解 巻之壹

江都 薙雪庵千心門人 薙甘仏我著

風俗文選序

亀城の羽官子五老井の許六滑稽俳諧新古の文章を拾ひ集めて風俗文選と題すむしやうやまと詞おのづからとゝのふ本朝文粹といひ我おりふし文粹を 本朝の人の述作すて文の体まつたく漢文なるゆへ今許六の文選を和文のみ物かたりのあらひのくさくむしやうやまと詞おのづとゝのふ本朝の文章と称すきりのを以風俗文選のなるゆへ支漢文を文字の殺と定め韻をふゝて其格をきれかたるゆへきれと文章をもて文選と古文とに託する度を代筆文選あきハ漢文とてる性ゆゑきれとゝえゝるゆゑ

京都帝國大學圖書之印

五岳弗神薙甘仏我著
風俗文選大註解
全部十卷
肯編 肯藏
作保藏書

して和文なる文字の敷さと共に頭部をとるを去来の風賦とし
五音相通の俗名をもて韻とし韻とは和文の韻をふまる一格なり あるいは韻を
用るなるよりして其なるよりして自由なる一二句後作をとりまるる其題の趣を
よりて其作を定るを学者心得とす〜

江東ノ僧 律師 事由字買年於四梅廬序

風俗文選に題号和漢に対して名つけしる風俗をみるにふるとよむ
本朝とつるの目し文選ハ梁昭明太子のあつめる文選の題号を漢
をかりてもいうの文章を和漢對揚すきことをもて風俗文
選と題号を冠しめしるる
序らはかきとよむ系のいとにあるる物くるのはしめをかき起すなり
亀城ら金亀山彦根寺の地すて今井伊家の御城則彦根の城なり
事の由許と成してよ〜しに文選ら〜めるまハは事由自まりしまを
集中鄙結の文ありて二段のよみ流りし風流ア元ら〜に集ら
める附よよちらを目ひし助け補ひしとる
漕船ら〜と酒器の名〜して酒をつきて飲さるといふ心なり

本朝文粹ら藤原明衡ら作る日本の歴〜の詩文をあつめて十四巻ら
やまと詞 今ハ〜人の目ら和選する〜上代の歌を引ふる〜に道の本意なり
文章一貫〜ら文則〜ら有二類句一用一類字一所以壮二文勢一廣二文義一也
設情有宅置言有位宅情曰章位言曰句故章明也句者弓
也夫人之立言因字而生句積句成章積章成篇也意
斷處曰章言斷處ヲ句ト云
モ詩 正義ら聯字分疆所以句也

風俗文選序

落柿舎去来

世ら俳諧の文あつて其集とつふるのいまゝ四ハ先原一〜ひおひ立のふる
俗ふと心よかるふりの希なしらむるの十とせ余ふとせ〜ん今や
つ系の誰ふ風雅ら服ふるまに管城ら翠を揮〜文場ら磨を〜る
者すくなるに今ハ文章ら筆を入て始ら業つ評あ〜後る頌讃の風流を〜く
す或ら書あり或ら論あり〜賦のまことを述文謀の義を残す自塵海の

文ありて許多の作をのこされ千載の後に能くていの文章の名聞せハ彼童子の師の白讀を教ふる類なるむや此文を考ふる者を此道を考る者なり他者ふつゝ五老先生と称するものゝ湖東森氏ふるゝて虛實なるを考ふるにいふ〳〵ものゝ人の名望を感じて此文選を造ふ免る

宝永元秋日序

此序文ハ吉来渡するすゝ〳〵貴の他なる〻〻同年九月ハ吉来渡〳〵
ふるゝ先師とある八色蓋義のるゝて文選をふるゝめる宝永よ
りゝ十ゝ年あゝ迄化ありしなる先師自選の集なり
去来翁　岩鼻やまるゝもひとり月の雲　去来
此句ハ蕉ゝ翁ゝ隅童〳〵て笈小文ゝ書入〳〵ゝとなる去来曰笈小文集ハ
先師自選の集なり名をゆて〳〵きゝ其書を不見草稿安ゝて迄
化まゝ〳〵ゝ此時やれゝ八ゝ自〳〵ゝ此集ゝ入ゝ侍るゝやゝ何ふ先
師曰我〳〵人笈の小文集ゝ入白二句指るゝ者稀なん此五句の
るをつゝるゝ此とゝる

管城八筆の名ゝ　今ゝ八つ筆の誰彼　此集を用きゝゝ先師の
きゝ元今ゝ傳ハり文義の解りゝ行ゝきゝを深ゝ
笈ゝ法のちゝみゝゝ
百川學海甲集上學齋先生佔筆ゝ云
傳記小說実を失ふる多〳〵只る始ゝ紫悟筆を造り紫偏紙を造
ゝれき皆明ゝ之ゝ此蒙恬ゝ秦の時の人詩の中ゝ已ゝ明數あり謂く女
史ゝのする系の筆又いゝく史ゝ筆を載る又孔子春秋を作る筆ゝ
は則筆〳〵刻るゝき八則けつる筆を獲麟ゝ絶す又尚書中侯ゝ玄毫負
圖周公筆をさつけてもちて時の文を寫す說文秦ゝ謂之筆楚ゝ謂之律
吳謂之聿燕ゝ謂之弗共考るゝ尚〳〵馬大年乃ゝ附會〳〵てもちて管績乃
筆ゝ云則ち今ゝの毛筆也毫ゝあゝ紫悟ゝいゝて始て兎毫を用る
ゝ蒔ゝ云筆を紙ゝ墨を和するゝ有ゝ則毫を以て墨を染ゝ
ゝ件〳〵件筆豈称ゝる可ん哉ゝ秦の系ゝあゝ筆を紫悟ゝ
造ゝ紫ゝ造ゝ紫悟ゝ筆造ゝ枯ゝ毛ゝ紫
〳〵麻毛を柱〳〵美毛を稼ゝ京兎毛弁管ゝ此ゝ時ハ則又豈

兎毫紫毫などやうの端端文字の筆といふ句ありて
以て後世よりあやまりてる之又紫毫の如き則後漢の時の人なり志ゝ
云の外戚傳に云赫蹏といふ則小紙也則紙の字なり恐らく亦紫毫
なけれども而あるべし紫毫造る而世の精工なる又云あらん
紙筆は二人よりはじまるといふ則不可なり
紙を後世に製り始る弁を切蒐の如く割り刀を利し牛の草を用
てあらつて稀くるより古書を簡策となつけり
或操觚以摹爾　或含毫而邈然　觚は木簡古人用之為筆

韓愈師ノ說

彼童子の句讀の作
彼童子之師授之書而習其句讀者非吾所謂傳其道解之
其惑者也
讀書の法は先句讀を明らむる事しかる句讀明らかなれば文義自ら
明らかなり也語の障る所を句といふ語障されば文の屬きあ
長き和らに其中のきりてよきあるべきりてよむを讀と云唐
の人は句讀斗にて文義を解する也句讀を要く句讀と稱す

文章の義理句讀よりてかゝる也句讀を緊要とするなり
吾邦の人は傳語を目ひて文章と云彼之義理をとる故句讀を
さだめる大畧其義を通するなるなり

風俗文選序

東　新坊子考

文選あるは吾朝に文選をうんやとこゝにえらひて始てふみを
湖東の氏子許多也凡文章は周孔の心を傳へ莊孟の筆に載せ
以て紅漢の心をつくしたる姿を傳ふるものなり又ますます也人は其姿をつくし
つゝ其心をつくしてこゝに始めて文章は何の心あるむ心を天地の
ちなる姿を世にいふ変化して其変化を志ある人をこゝ姿を志ある人を
いふすれ者の人の下者をまみつる也道をつくしふべき心なるれば姿の変
化をまみつる人をいふ也されば源氏物がたりはけ物語あり
也やまとの人のそれ於ふ和歌をつくれまらくの人のそれ歌をあそ
りこゝろつかひ行及おちこちの事をみると情お納言の枕草をらつる

毎年おひきてをめ作りあるせむとせいらて業花物語といへる
ものと我いまとなりてよくもきこえし伊勢物語の言葉くふきこえとよ土
左日記らまこさこなりの日記らおのれのおもなれいへ人のなてえもあるものの
我らなてれとふらんり記と紀ら同一心なるり旅よ紀行とつふるとあるふ世
ユ平家物語とつふものありてひらよりのふ的言葉ふらあせとて祇園
精舎の鐘の声よ諸行無常のあらはをを作る也平家物語とつけるる名を物
に対しる名るるり略の行りら方おの記よあるへる人多り般若集といふ
ものらさるるものよ般若あるよや四季物語といふものあて其人の作るら
あるはこそ撰集抄のいとこふり歌の心のきはくるふ人まて撰者乃
法師のあるひ庚申ふ兼好法師のつふふ草ふるるおるも作ん
ら硯ら向て物をさくめら世情の境因よあるふ合点と見くるる或ハ宗
祇の俳馬の花よ或ら長庵の春日集よおのれくる心よあるてむりの深浅
つくへすしいふるのなり天ら見をて月よあるひ地ら見をて花よ
ふ竜吟すれハ雲起り虎そふけハ風冷一樹よ響る春の庭いつれらかるらを
つくりてあるふむ先師常よいつりう漢ら之乎者也の四字をもて貴

賤尊卑の詞をもっち和ふ系遠波の四字をもて暑一涼一の時宜をと
のふ文章らまて系遠波つるなりとそされハ一日の長短を去ル二日の日
讃をもくきれハよるむ者息のつぎ場をもすして海雲街嵐腸とより
つけくんはてるさ心やすんせら兵をらりても拾遺
ふ中よ我ら代文選の時を四多てれをふのるくとう

宝永元年甲申睦月日

文選梁昭明太子の周秦漢魏梁の代近乃文を集て三十巻ゆ
唐李善ら註よ五臣の注を加くて六十巻ゆ
巻ら白集
源氏物語とせるもて巻五十四帖の草ふとやらんくろみよ行ふ
そくりひろけてそくみくれる糸すちのいなきやうまてさくよ
よみとうれ作るぬらいにとふさし兵列よのちくるて白ハさ
ふくまくひらそてくるもてへていくく六段平いとちつきはかけをきの
き素くくんくのちよ入てらやふつくのさくうまてすの色ふ

あやめなどを孔穴をとをるやうにくくなどいふ志賀の彼方八代調なと
こまうあ尺わらべうの如しなど
分我ら代文後よいつるあく都ての文章いくなほうつくしくよみた
ハおのつくら文意をあくくるものもおのつと其文義をほるよいと
也ハ意をよいよく深うほるべし代文選を作者多くるを考しめんとて
代序より代てのきい草子物語の題号をあけて文をつくるなり
枕冊子ら大貳三位他うつく物語三巻と三十巻と数部あり所うの物かう
二巻あるおちくかた五巻拾遺抄十巻常花物語十巻いせものがたり
ういなせ物語とつみ土左日記二巻平家物語三十巻みこ十巻の
ものゝ長門本其外あまたの方丈記略長明ら発心集四巻あ
かう撰集抄九巻宗祇終焉記一巻巻白集九巻
源氏ものがたり一部皆寓意ハいひうつ口ほら世の人の色ごゝみ
ものをめてのふるまひを為をかく作るしものがたりを天台ら
四門より表し或ら不可説の物語ものがたり

風俗文選

自序

文ら貫道の器也孔子ら余力あらハ先を学へといつり吾朝のむかしよりハ和詞
の文筆庸ならち車ゴみてむさしと世ておこるうる言葉ハ女ハ女なの業
にして源氏枕冊子ハ男女の中をつくし實ら歌よまひべき道ひきうる
其ゆえ歌連歌の文法ゆえて詼諧文章の格式一言もう先師芭蕉翁始て
一格を立て気韻生動をあくハせ仏ハ俳言漢字をまぜくくるる心ら芳
野龍田の花紅葉をうらやくく和歌の清ら志をよせ雅波体の細さまあ
りとうるて縦横自在をつくくたるひくの趣意をうるところなくて
童蒙ハ知い物つくくよ蒲て果ら杉坂を仕業となせる其ら天下のるる
るて今ものあくらの文章鮮ら二十 文ら一百十有余篇皆くく俳諧文
章なりて花をよみ月を見て此門ら入ってとて才子ら五老井許ら六撰集を
寶永二乙酉歳自序して風俗文選とハ云ふ

文ハ貫道の器也

古文後集　集昌黎が文序　李漢

文者貫道之器也不深於斯道有至焉不也易繇文象
春秋書事詠歌書礼影其偽皆深矣乎
これハ女史の筆すさみを　誹諧文章の格式一言もなし
我ら許六子ハ文選を見られる趣意をいへる文段之寄女
書にも子ども歌よみの詞をつくりあつめてあそふあれハなん
それらの文章をあつむる者ありなんや後世の道ちかく
且今の世のもて拾ひし芭蕉翁没後十とせになりぬれ
ば其門人もかれこれいまだあれハ道の盛に行はれを後世
にもしめ且初心のくるしみに文章をつくるべきたよりある
とあつめ置ものなり

文質之道交轉無定
文聲婉轉而豔媚　質声淡薄疏散也

五老井の別墅ハ中仙道高宮宿より右の方に京村といふ所
に在る所を五老井といふ井あり静に澄て此
所に葬る塚ハ丸き石を立て墓印ハ石楠山の木を植て其の名哉

を建られたり
崔豹古今註曰尭設誹謗之木今之華表也以横木交柱頭
古人亦施之於墓
白虎通云庶人無墳樹以楊柳古葬者松柏梧桐以識其墳
童蒙抄云　山寺の南表にしるしをなすけのたてるを古人はこれをしるし
のつりやと云りしといひつの木となんかわれハ坊ちのよめる
ると云てかはりなしと　ちさとひの木と云りとそ申すつる
東子五老井許六　芭蕉翁の門人なりとも云るなり
むかしより和歌の道を捨てハ師匠を定る事なかりしなり　能因法師
は東の長能を師とせしより　歌道にも弟子といふ事あり
山深く露をつかふる事ハ乃かかける上に附るなるなり　安解
気韻生動　　畫品有六法
一曰氣韻生動　二曰骨力用筆　三曰應物象形
四曰隨類賦彩　五曰經營位置　六曰傳移摸寫
百人一首古説　加茂季鷹著

後の人源氏物語の文よりなりて序をかくいにしへや物語りかの結
の文なり序ら序の弁あり男ら男の文女ら女の文あり大物語女ふ
みなりかるるなり
今我ら世序よいつるいかく源氏桜衣のくるひをくふみて誹諧
文章の格言なりといつる序文章つくらんくらより考て序ら
序の弁あり男ら男の文女ら女の文あり源氏あから いきふみ
なりとら御ふのいへる誠ら格言なり許ふみら序よいつるひらん
遊きなりといつらいへいの文章あり まを名ひらを文章
をつくるくきたるうるせくるる

大註解自序

風俗文選一名五老文庵ハ芭蕉翁の高足の骨随を伝るいみ
曹士五老井許ら六芭蕉翁の骨随を伝るいみ
大和魂もてあつ老ろへ歌文章躰ら二十 文ら一百
十余篇皆く誹諧文章也百五十余年の今子
傳て誹道乃文章ハ悉く一書の
外ものあるなし 玉ちいくむこるおいるむこるり
かへしく是ハ其序を意を玉まど種くの
文のくら高きあいやきあ古よ多ふ多ふ
へきあ此へむへきあ大ふる八天地のきいふるお邪村
里の名よいふ小ふるら人倫の上より五ふ名ふ

[illegible]の[illegible]に[illegible]解し[illegible]多し　初学[illegible]の人此
書を[illegible]を[illegible]の文章をつくるべきもとせむや
おのづからの解し[illegible]もて先[illegible]亀其事の
道徳[illegible]に[illegible]我[illegible]ものき[illegible]ちよりみかいさ[illegible]
るせ[illegible]書あ[illegible]先[illegible]引あ[illegible]考
ら[illegible]や[illegible]むや山崎の宗鑑法師の[illegible]
れ[illegible]み筑波集[illegible]ば[illegible]たつは集[illegible]
此書の註解此書を作者達の心[illegible]や[illegible]
[illegible]合[illegible]合ぐ[illegible]や[illegible]
風俗文選大注解とも[illegible]なつけ[illegible]
[illegible]

嘉永紀元戊申三月　芭蕉庵桃青翁門人
甘雨亭夕我七世孫　佐保姓　葎日夕我

凡例

一此あけて考るせるハ皆文とき[illegible]一[illegible]きけて考せるハ
註解の文とき[illegible]通を考るとは
凡文章を作[illegible]んとおりゝ考ハ先其通を[illegible]
古人の文章を熟讀(ジユクトク)して其語を諳記(アンキ)し其文理を解[illegible]自
然ハ筆を[illegible]て文を屬(ツラ)ねんとおもふ心起りて何[illegible]心あるも
文ハ著[illegible]ることに[illegible]れる文ハ體(タイ)あり法あり體
なりれハ文といふ法なりれハ文をなす法ハ體裁(サイ)なり
體ハ文ハ[illegible]如し

引書ハ方葉集より代々の歌集よりつぎ物語の類訓詁の書よりて
ハ此文選と同じ時代の書と引用也是ハ同じ時代の人の文章を
あつめて本文の意をもとめんとてなり又雑書といへるいさうもな文
なりあるハ引用也又ハつぎ傳ハ訓詁なとハ古くなる證なりと
いへるは元稹の昔よりいひ伝へるなるハ引用て拾ふなるものなり 仆我ら
友ともの傳ハ其庵号姓名をもとめるハ仆我いふもとめハ已ら
意世者うて強ていへるなるあるハ領離(レキテキ)城瑯(ヨハン)瑯とするのそもある
へしのらの四ハき考を待ちん其引書四ハきものハ書名をもとめ
雑史の類ハ史伝を考るさるもあるへし
又其物ものより其ちなみなる本文なあつらざるなる初学ひのへく
のくるるにるへくとおりあるなるハかきあるハ書よせの題意(ダイイ)ホの辭(ケ)
をのせるハ仆我の老婆心ともなるへし
祖義の門人多くとい人なるなる草ハ識の隠逸なて書を著ハ人なる
とめハるなて其句其文章多く偽ハ嵐雪もまた草ハ似ハるなハと其門人
なて句なる又集ハ出るなるなるハ去来又なるなハ著せる

書もおなし其句許六なる考の三哲英才なて文章發句集物とも
三哲ら実ハ誠道の逸物なり其あるハせる書ハいくてハよりあるなる
らされと嘉永の今ハいくうえ禄のむしよりといひの集物者のへみ
て其書の元るものハくはるやさるとも考の一哲のへ其あるる書あ
まるなるハ今の世なるものくのなるて其昔を見るなるなるひ興のなる
ものなる引書ハ用ふる作者の名なみら思其人の行跡なて證とする
に多ハ引用なハいとん許六去来あるハせる書ハ行しの集ら偽書(キショ)なる
といるるなるなるえるる見ら其書なと祖義ハ何ハ名なをもとし
て世ハ術ハ心ある書といるなる者の日あるなるるのなるは
祖義の弁を入なひなる上の集なるハ去るの対して偽書といるて集中
のるくをくく偽るといるるなるハ仆我ら其偽書といる書も
於るなるのひハ引用ひるもあるとるハ
訓の字集中言葉人葉とともに用ひるれなを文のまるくく
あるるなる用ふるもるて

仮名よ古体近体あり古体ハ万葉集のこゝろを主近体ハ定家卿
四歌所の人々となられしこゝろをいふなるべし春吟家芭蕉翁
をはじめ近体の仮名を用ひられしは文選より近体の仮名
つゝひなりかゝるまゝに古体の仮名をもかゝるなり文引書とする仮
名よおのゝ八一字を改めて原本のまゝとなる
跋ゝ汶村ノ風俗文選仮名つゝひとゝいふ仮名ありてこゝ一部乃
仮名まひの近体古体をもちいふ

風俗文選大註解目録

前編之部

巻之壹上

作者列傳

同下

辞類

柴門ノ辭　芭蕉翁
示二秋之坊一辞　支考
送二新道心一辭　大草
鉢叩ノ辞　去来

巻之貳上

賦類

南都ノ賦　汶村
吉野ノ賦　大艸
富士ノ賦　嵐蘭
前磨山ノ賦　支考

同下

湖水ノ賦　李由
後丸山ノ賦　去来

賦ノ辭　許六
示二古鏡一辭　李由
焼レ蚊辭　嵐蘭
四季ノ辭　許六

鎌倉ノ賦　許六
松島ノ賦　芭蕉翁
湖水ノ賦　李由
後丸山ノ賦　去来

巻之参

賦類

鼠ノ賦　去来
揚揮豆ノ賦　毛紈
閑居ノ賦　伎村
旅ノ賦　許六
四睩廬ノ賦　李由
招魂ノ賦　支考

譜類

百鳥ノ譜　支考
山水ノ譜
百花ノ譜

目録終

本朝文選

作者列傳

芭蕉翁者伊賀之人也武名松尾甚七郎奉仕藤堂家壯年ノ時辭官遊武州江戸風雅為業號桃青乃誹諧正風躰中興ノ開祖也嘗為遺功修武小石川之水道四年成速捨功而入深川芭蕉庵出家天下称芭蕉翁遊東西南北説風雅助諸門人國中悉歸芭蕉風一遇難波津伏病終平ス年五十一葬江品義仲寺

俗名為七郎忠為新七忠左衛門訳ス名ハ又松尾與為母後品宇和侍の産地氏の女なり實又ハ伊賀上野鉄砲鍛治松尾甚兵衛なりとも云ふ

正保元甲申年生元禄七甲戌十月十二日於大坂卒す春秋五十一

翁はもと江戸着城江町名主小沢太郎兵衛方に頭陀とすしのち芝口町に庵をむすぶ伯角堂無名庵義仙庵戯中庵鈍月軒風羅坊杜幾子ホの号あり小沢氏を俳名トスとつ

柳青葉ハ小沢氏ヲ俳名トスとつ

き羽織をきられ
給ふ文ども元禄七年九月廿三日の安亭まで歌仙を終亭あり
かりそめのくさびらの毒よりやうやう十月ばかりより病て日々に
弱りまさり七日迄のうちふるへ
八日本節去来よりかゆを八合飲出脇を何れとて沢山に
及えて脈作るべし心をつくしとの事薬力とかかれ孤竹の治方を他醫よ
りとあんとおのふ去来仰せ申ハ日本節ゟ来れなしとのいうるを伝ふれ
を虎口竜鱗と醫ハ云ふ天業をいむうせむ我かく悟道ハ伝ハ我ゟ
呼吸のかよいんぞらいつ迄ゟ本節の神法を服せむ他ゟ求る心なとのこと
まいりる風流を徳人皆百姓するなり支考ゟ加ふ去来ゟ
られハ去来心ゟ病床のきりんをくくりてやてふ去来ゟ俳名の言葉多
く大期ゟ辞世ありさいうの名匠の辞世をなるしやと世ゟつゆるとある
十あつれ一句を述しなて諸つ人のをくみとうぬて仰日きのふの発句
ゟ今日の辞世今日の発句ゟ翌の辞世我生涯ハ拾ひ句一句ゟ
辞世ゟ云ふハすしり我辞世ハいふ句ゟ可人あるハ句ゟ可ひ拾

句いつれなるゟ辞世なりとやなまりれ諸法従来常示寂滅相ハ我
の辞世ゟて一代の仏教ハ二句ゟ外ゟ古池や蛙飛こむ水の音ハ
ゟ我一風をおこしゟ初ゟ辞世なり其後百千の句を吐ゟ此意なり
まるハすゟ句をハて句ゟ辞世ゟきるハゟ作るなゟと法華経術ゟ傳ゟ
りゟと注ハゟ云ゟ息のかきり語るハ実ゟ微妙の句ハ人
なゟまるを云ふ一九日くくの百年ゟて古き衣裳ゟ脱ゟ
垢つきゟる不浄あるを脱ゟ脱ゟよき衣ゟ脱せくゟ申ハ日
永辺地海湾のほゟゟゟ草ゟ為ゟ墨ゟ拾ゟて脱ゟ
分のかゟるゟくゟお待の上ゟ来ゟ来迎の友ゟちにきゟくゟ鬼禄
ゟ上ゟむゟ人生のゟ也お草ゟ去来ゟ云ハ扶用ゟあハゟ新
まくふと業ゟ入て吾舟ゟかかゟ新ゟ
旅ゟ為ゟ為ゟ為ゟ為ゟ為ゟ為ゟ為ゟ為ゟ為ゟ為ゟ
為ゟとめくゟ為ゟ心ゟゟ作ゟいつれゟくきゟれゟ辞世ゟあゟ辞世
ゟあゟくゟゟあゟ病中の吟ゟ去ゟかゟ生死の一大事ゟあゟ
ゟくゟいゟに生涯ゟゟ一風ゟ流ゟハいひゟゟ生ゟ毛ゟ安執の一ゟゟゟいゟくけ

む今らかひす　去来ふたよあ　朝雲暮雨の夢おのづから出るみちあ色
ゝ於おのづから風雅のこゝろ　行の意よつゝしみ　今ハのかきゝる
其風神の名章を唱へのふゝ　諸門系のゝ　他門のゆ　志代の新
鋭なりと沖すり泪を流し暇あるもの是をそい魂を慰さむ耳あるもの
是をゆハ毛髪を逆ふ　列坐の面〻感慨悲想して涕絶し〻
声ゝ　是所一代の遺教恒也　しりゝ結ゆ　おろくなり
十一日の夕おのゝかけ　東武の其角きゝる是を東武の淮徒目律を系
宮の房を和歌紙布を求ゝ泉弟より浪花より入し　はゝ　所のつゝ
おのゝ　ゆつけそこゝと　呼き　ゝかけつけゝ出る病床よ　ゝ
是骨連立　ゆひ　雅を　ゆ　旦　旦　ゆ　所　ゆ
ゝて唯〻泪　ゝ　其角を言　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
去考其所の　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ひ　ゝ　物語　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
中　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

去来柳ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
上句　中のあ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
去来曰　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ひ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
おもひよる　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
一坐　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
蠅　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
の病苦　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
と去　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

小さうきるとやさうさのかゝ師ハ平生名やらうきるよ好くのうたまる
やうやく様き辨をえんうけたへうて諸人しれしとおのゝ中よ此気よ運ふ
るまで世の中て此心を労しめやる奇怪なり此後此病床近くよりつ賜
ふ其よく其坐を立の上く声あらうるよ次の間へ退きたりし支考も斗
らんとのいひおゝて諸子の中よ面目をうしなひしか惟然よすゝめて我
まるありきとかきゝまていひく

しかられて次の間へ出る寒さ哉　支考

されハ支考なりけれハ師もふかくめでてとかしうけれり

鬮とりて菜飯たかする夜伽哉　木節

皆子なりみのむし寒く鳴つくす　乙州

うづくまる薬の下の寒さ哉　丈草

吹井より鶴をまねかん初しぐれ　其角

又惟然吟声しけれハ師も支考か句を今一度とのぞみのひて丈草出かされ
たりいつもながら寂志あり調子面白しとおハされし去りてかめのひまり
いつもかわらぬきんの句はきとよろこひたまふ木節人熱をはかりける

辨をこえけれハ其角其故を問ふ木節か云病よ係中の証といへるあり大病中
絶食なるに俄に食のすゝむ事あるを絶症なり死期ちかきにありといへり
されハ翁きのふあきなひぬるに於中より又寒熱往来ありて於此より
顔色土の如く又えのひ志かく胸乱しおもひ人も又からむしからむを
又実証なりとのひ左右なる金羅香丹よりハ派ついてきまうらせなく
介抱し給ふ所られし八十二日なり薬て定ふりのひしか落さての体のもとより
ぎあきさせ其角去来丈草を呼て向ひなる人のおひ輝をとらんれハ路通
きくまふるをことはの行水をのぞみのふ木節去りよ制しけれと去りけ
のぞみのふやむことをえハ湯をひかせ身をせんり空を翁なる路を木節か
醫術をなされしするとつけり謝しおひ翁之人の気を退くめされ乙州
正秀をた右よし支考惟然を筆をとらせなき残のもへことを遺言し
のふ病苦すらしよつえのひ人く奇異のおもひをなすり伊賀の遺書ハ
よつゝ去りくめのひ京江戸美濃尾張かれさる中よ遺言し残みふ
に短筆に人の中まて筆記す次第に声かそう痰喘まてなやみのひ
けれハ灯中に昼湯にて口をうるほしまゐらせ又やくれて去来よ向ひ

かくて此寛永阿闍梨より路通かるを作者其居所ハ丈草乙州か手
送りし消息に露霜と八日捨れ候おしいつもたえてるをみて雲井の宗祇
ふゆなり侍らぬ程に数年の薪水の労をめくみすれおのれ我亡骸をハおよそ
まりて程なくれ風流を交りなくへ此ほかたのもしと侍る諸子ありて伝へあらんとも思ひ
給ひて余言なし合掌正しく観音経ときこえてかすかに唱へて息の
かよひもなくなり申の刻ゐて埋火のあたゝまりのさむるかことく治定ならて
きこえまゐらせけるよりかゝりて嫁入あひぬとおもふ程に正念にして終に属
纊につゐに終りぬ于時元禄七甲戌十月十二日申ノ中刻行年五十一なり
即刻不浄を清め白木の長櫃に納めまゐらせ其夜ひそかに川舟にて伏
見迄供し奉る其人々にハ其角去来丈草乙州正秀木節惟然支
考之道呑舟治郎兵衛以上十一人花屋仁左衛門か京へ荷物を送る体にて
長櫃の前後左右をとり囲み念仏誦経おのおのしくして供養し奉るハ
鳩のとるるに驚きもしと止めたまひしに信李由のまゐる舟も行合
りけらいさゝて其をうつりけるははかなき物語して伏見より京はしまて
まゐりて粮をたべ伏見にかゝりいそきまゐりしふる事十三日巳の刻ろきまて

大津の乙州か宅に入奉りて乙州か伏見より先立ていそき帰りさしおきを
掃除し清め沐浴の用意なし沐浴して道呑舟治郎兵衛なるは御髪の御
させしへハ時代より丈草法師ゆかりけれは浄衣浄衣あらて智月と乙州
書経なる浄衣白衣まて召させまゐらせしへきを施していたゝきまゐらせ兼て
茶色の衣装そそのかれとすゝて茶色をめされけれハ智月尼の手ひ
としてその浄衣も茶色の服まてせられける御送葬は十四日と定りかき
られ日没になりまゐらせ義仲寺の直愚上人住職なれハ導師なり
三井寺常住院より弟子三人来られ読経念仏ありて入棺に其夜
酉の刻之葬式いよいよ十四日酉の上刻とれきかいむ豆の内よりあつまれる人ゝ
は雲霞の如く幅にひとつる人数凡三百人余あるかとぬ近所よりあつまり
男女迄おしとゞめしむ中略して遺命の通り木曽殿の右の方に埋
葬しまゐらせ十五日去来其角はしめ膳所大津の人々銘々に詳して先
とて土かき上て卵塔をかまへあまひ塚のしるしに年ふりたる柳あるを
其まゝにて此庵の形見とて植くの芭蕉を一もと植てのひたる茶
の木の今に盛なる花をたてまつり揃て垣をゆひめくらし香花をそなえ

向まるのもと度しといふ生ある其名豊芦原の浪のひきもの德
芙蓉の徒頂の弱ふ人丸赤人のむかしらいさ考る末代のなぐさ
實に我義ひとりといふべし

為光寺殿、送る貴状

此花と高砂の翁念よりて高砂の如何樣にみ高傳敬に年
被寄山の心弱く山陰路に入る人の尾市の
路高恵寺老初年殘に心ゆき物思もなき人の
まなび方に通ひおよしかゝるべしと

十月十日

松尾芭蕉

松青

市岳雪芳す 路高 苦藤す 意専 猿雖す
十高 年殘す 土芳す

江戸平田明恵寺律師李由の跡を傳て祖義真筆五百崖爲一
芳そらけの花見顔する崖 う郎

花ふくるゝ 松ふくるゝ
岸のやど 声 時うつる 嵐の窠
形すめる 月の細や 通 庚
雪の山 月の光 山の上
芳迷すなる 芳を傳る 辞あ
芭蕉 桂 桂て 桂 萩の二葉
六郎 の二人 世成 重
鶯 て 白 あ 重 き
て千里 重 ひ 秋 れ
猿雖に對して
ろく の ろ 都 仏 て
伊勢 高 高 代の春
日の雨 も 象 ら
松の 梨の 猿穂や 山 し お

題杜鵑

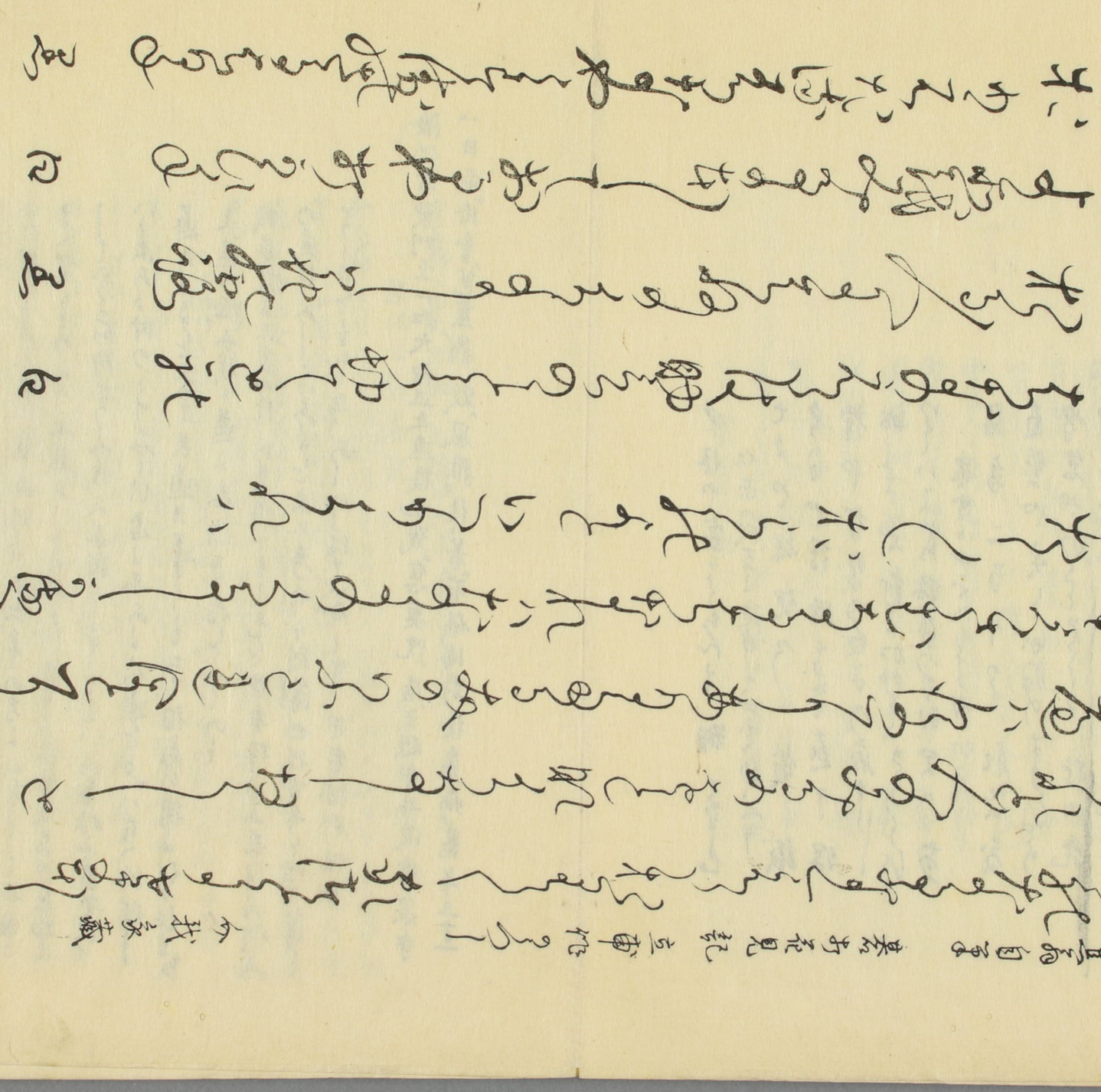
笠の備ふ柳緑る旅おこり哉
古屋や花の旅ぢの捨ひ屋敷

相模寺にて

学ぶる成仏ある井戸の林こる
春風やきさせるくくて和尚屋
古寺の梅千年ふむ男こうか
翌年といふ小僧ふらん乙梅
雪ふるよふ咲むさきの芳狂波ル
梅折て橋よ遠ふ毎ひ三軒
逝水や橋流ル井の奥
くれ迄きく四ツ谷ふ流草餅
尚白と浪花よ
只ひとり秋柳よ者ふる木橋こ軒
あ〜ふたに乙や五戸の浪庇
髭男の画

夕涼や盆てくちんも 御てくも
行共代ふ迄四ツ谷人子
七夕や深況ふ 俄 旅
名月や諸胆ふ遠干浮
燈や伊勢の白子の庇きし
淋しさ新よかけふきくし
つくいて義穂ひろむ実ふ
雲の四ツ谷
張鳥 二百十日 秋安
角髪や夏をひねのまひふ
宵第やかくくくく 除の元
つく秋のふて蟹よかくれふ
一足の子ふて 門ふる

変ようせる組義の自第ハ碁打花見の記て雑色立甫義の
伝ふを概青義の加点巻ものの借いふお返きて傳ふ中
の文章廿六くくく 愛白サセ白を存せり此油物ふ我ふ多



死む共申さうつて国一位の人々の一覧を備ふ
分我が家職簿を綴るをもちて世らうとひ祖父分雅父魚行とともに
古画真蹟を好く是を賣買して家業の助とせり此巻物文化の始
の比買ものを他く賣渡ひるの玄六年の春之なりて分雅の
方へ買ものをもとめらう分雅あるいはきの如ひをなす是後我家の発物と
して今より高時せう分我又家職をもちいるをなみ家業の
いとまある時のうのみ道を志ある人道をとくいたく謝話す
道あるを言て其道を遠く進くもちて祖義の徳をむすひ
我家業を正月の付め業作を立て是を笹看板といふ其ばめ何人
の発ばめとつるを未不考弁に則簿也往古弁を伐て簿と
なりかをもちてあつて筆とせり笹看板則帳也

浪化者東門壬一如大僧正之連枝也號窓真院居テ越中井波瑞泉寺
一日逝洛會芭蕉翁效風雅後著省儀海前後集病甍年三十二

号鷹〻山人示寂ハ元禄十六年癸未十月九日　東花坊

浪化公俳号記

今日神無月九日物のかなしき日なりこの比居は別も此月をとそ思ふ我
すらし中異ある故かいさめるる是心の風ともかはりて心の倒もとこそ
花もゆ山をかけめるる是心の風ともかはりて雪ともかはりてこそ
せむりすすもくて此道のやつこともむまれきなハ雅行のつ…ものこま
しくやはり心のあつひもの物さこめのはせこそものあるこの風
りはこそかるいひのハ雅と今の生死をすのおるもいて
うて分の上をはこひぬハきこむをるつ孫さあるゆ少なりてひ
日此居を生るを道を斯文をうるとつる三越の人のなけお
るこさこむやはとせのむこらかの為と俗の東花坊うてかるめの風
雅をむすひのしを誘ひを道の虚實をかこらひおこさこて風雅の
筋あけんとハ習一立ぬをこるる法門をそこうかるの塔を越へ風
とをかここをちをう殺めて共謝のあやまるてかくへこの日
の発句をさく彼ひの縁をそめんさうとたらひるきます

せをる世よ初しなハかくハ寺しますての秋海とやみ山の一集ら
遠く八坂の外の山をかの月　そこの花のそこよ花ふるらゆくお
しまつよ笑ろうかつてしひもいれもそこ春ひめてるまもそれ
その花の西かけのしもくの泪ら春めるく〜十岩
金文ら文様くゆう

郭ら　山門のまよ色ら〜〜　浪化
声　立て橋のもれのるまの瀬戸
さくつりと累てるの小るこうの
秋立や　鶯の　附元のさのろ
水多の明るけ多くさくこの柳
高笠ら　旨的ひさのうとうかう

芭蕉翁の雲水行脚も去れや
秋なて其るをまけ吉人をそこ
里稲のるいや多織めうの秋の孫
りうるくなるこ　あのゆくこうの
春　月やけるくゆ郭の　儀若

宗山忘ふるいハ百生のいるう山
の〜猫の声もつまるや宗山の内
葉細や　隣ろ合こ　梶ろ花　見こう柳
一本ちくくらくこと
かくむ　の姫より蒔まの二をの
種麻や　くるをるやけ細
三月十二日義仲寺古翁の塚ら詩を
伊賀や　苔のつきそこ墓めろ
二三日　坂ろの白いやま月やみ
笑〜　細〜やをこ多葉こう柳
扶海て　こ仏を伊賀のいきぶ
麻売ら　あ皆戸の月ろ
極楽ら　月扶の十扶
附多雨　ちいつる　ゆて来る
大宝や　雨のかしらを　ゆ　会せ
白宝　宝法御ら山寺ら来るをしめて
宝熱こ　春のら秋　山ちむきぶ

僧丈草者尾州犬山産也壯年辭武出家隱松本山上蕉門之
騷客也能詩後三年閉關而終不出病死常讀法花經一
年四十四

公羽の上足丈草法師
東齋隨筆に清範乾に空晴法師の法孫已講の上足說法
無双なる文珠の化身なり
去来に丈草の詠に今宵きさらぎ末の四日月に星を踏まるる
禪師の弟子なりぬひろと紀南の正秀に丈草に晒る
る涙ぬぐはぬ人のむかをおりふる尾張富士山

に仕て勇猛の名をあらしとやゝ
今戒を丈草に誹オハ晋阮籍に似たり同謙に
其後清の史邦よりの五雨亭に後年先師よまれそめられし
より二夏の路金の内より四日の史達の上に西をさし
むけて吟會多く門人をかゝ先師の言に門通よりみ学る人の
上にしるむる月を越をしたとのくひ其ト地のるつきる
らやむて志れる性くるみて号のふるとぬまに感ずて吟
しく人をく詩に常に門るすしくるり嘶
晋書曰阮籍字嗣宗屬文初不苦思率爾成章

元禄六年丈草
夕立に都乃むくまれ
つて立て帆よるる袖や夕すゝみ
旅行
かくひるまあるくもり結日のみ外
風雲や附るとくる比良表

浅山のしらしつまの庵の上
蓬莱やありつむ嶺の雪の松
一方ら翁の句傳へしらしこの神
　遊長筆る
筆の鮎をひろがせ渓く流れ
夕立のかしら入るる桃この花
　孟郎観叔遊
叔はかしのまきをひいつ床のやまよ
游ける魚のすみかや岩と菜
聖霊も出てかりの世の旅姿
本咏の入まつりけり蘇乃松
鳴きくれて目さしもらしし庭の秋
水山をつめて立ちし月乃君
衣つれて帰りまゐつぬ叔魚この卯
宿りれとなるも鳴されきりくれ
やすらひの海を祈らむく時ろしト
弁箕戸よあかりふきすや梅の花

花扇ら岩にかけたり花むしろ
すしきの出うらし　岩る　渓
雷おつる杉に折らをつくりと
納豆するときれや岩の雪起し
小堤栽や町をうち鍬の鹿の声
一もとはちさけ精も氏ゆ衣もやけどふ
堂に此の新蓄まきる秋。ふくとこ秋
芭蕉翁のむかしくもつゆかくあつめき
杉の庵に偶居して心細く住ければ
去来のりもくやきける
秋しも更に落陽の後のくすり　錦
之し
秋雲や人参つんで墓まゐる　去来
　大山之像讃　二句
風葉る羽織ら襟もつくろはし　蘇
きのまさ扇をかけて又涼し　其草

僧千那者江列堅田産也居于本福寺釈名妙式上人嘗任律師
號蒲萄坊蕉門之高弟也

享保八年卒七十三歳

まゝかりの形や柳桜　千那

海山の雲むら雨や生ル度
水をみな弟子の名を叫ぶ雉子の声
おもひ寄ぬ月や夕ゝ雨と押やと
如月や坊の加とまるこうやの燈
雪ふて三井の鐘ちる春の夜
雪解の水ながれ出ぬ
春の月やうの穂をもれ出ぬ
蒲ゝ粉粉しく佛の立かし
夏食の酒債と負しうり
人を吐息をするうんをうり
新蓮ゝ岩梨あるゝ猿の皮

僧季由字買年近列之産也居于光明遍照寺釈名亮隅
上人嘗任律師入蕉門而学風雅年久故韻塞篇突
宇陀法師之書著病死年四十五

宝永二乙酉六月廿日卒　号孟那觀　四梅序

韻塞序

風雅の實然山水を慕ていまゝ亡師の跡をさゝおもふ人ゝ百枝の
ゝうゝをしなるゝや西くの揭貴妃よりうゝ甲に似せて気味を

あるとき翁の画像を写され西曳口史の筆をかりて表を請く雲
となりぬのち何を範とし誰を柱とせん

元禄辛未十月宿明照寺　翁時二四十八才之

當寺此平田に地をうつされてより已に百年に及ぶとや御堂奉加の
辞日竹樹密に土石老たり誠に木立ものふりて殊勝に覚えければ

百年のけしきを庭の落葉かな　芭蕉

御香備ふるて銀杏の落葉かな　李由

言ふ物のつくぞや大根引

小坊主に念者さいかるこがらし

冬の夜や一めんに降る淵田の橋

寒菊や火を焚く方の表間

大根しを鍋蓋ひとつの初あられ

を今のうつて置る松の雪

御寺の手習あつかる宗

寒声を張りするねのあらし

すす掃やいろりふさがる　蕎椒

ゆく春やきのふおもはぬ茶漬かな

春近き三年味噌の名残かな

寺町や向ひ合せの梅の花

寒入や軒なき里の春の雨

下京のけしきを消すや春の雪

初いさの髪を梳るる柳かな

見きものひとつの花の雲井かな

雛子のつきり折るる花見かな

五節句にはつのきても一重者

永き日や大仏殿の鶯清声

ゆく春に飽やすずのむしり物

郭公かつ茂川の水山法師

蓑笠も蔑み鵜匠ふしや川おろし

苗塚を体ふやえぶる

おもふことつもりて町の夕すずみ

やき立のめしの匂ひや秋の風

下草のあらしにおる暑かな

食の湯よ行のおくるをそうれ
はすの穂を[illegible]て[illegible]三日の月
名月や蓑まの花をつくろう

亡母幸回忌

四年の尼くつをぬて袖の露
顔やさて花[illegible]うの角つく
むく[illegible]や[illegible]の[illegible]
秋のみを[illegible]ひろ[illegible]
葉細の一[illegible]や秋の雨
蛙の声の中よいさ[illegible]
田仕事の[illegible]清き[illegible]
病[illegible]の際や病屋の顔つき　許六

苗しろの[illegible]
月[illegible]の[illegible]　本導
[illegible]　汶村

宇治川のほとりい[illegible]の

支考字ハ盤子(ハレシ)號東花西花(ト)亦號獅子庵濃州之産也入蕉門業風雅一方門人也先師滅後遊東西南北説風雅助諸生故往々慕支考風者多矣中遇居于勢州山田後歸故國作二誡書數篇辨俳諧之論

濃州山縣郡の人也名勢氏黄雲山大智寺僧錦巖主と云ふ十九
墨下山東花西花野盤子蓮二晃龍白狂黄山梅花佛
十一庵(伊勢)獅子庵享保十六年十二月七日卒六十七歳
東ハ[illegible]所ハ東花坊と云ふ西ハ[illegible]所ハ西花坊と云ふ華の字ハ栄也光
也とあ[illegible]ハ東花集西花集といふる東西二集の名よりか
支考むしろ[illegible]のはめ其寺の[illegible]
いろは[illegible]
[illegible]の[illegible]

おほくてかくハ中山つれ盃母か友となりひとしは故なれハ今の為きへくにて生
知の文見も心へきるよや黄山は水辺に丑寅にあたる山を黄雲といひ
寺を大龍とつよ鷲見の美濃守の建立にて玉浦一派の本山也
十一庵ハ伊勢の山田にあり庵十一日に普請出来て十一庵といへり
支考壮年修行し時駒込吉祥寺の江湖にありて後他寺にうつり
ける深川の芭蕉庵にいたりて誹諧を学ふ其角嵐雪杉風なとよりハさきの
事なり俳諧十論に あるとし武江の芭蕉庵にて茶話禅と
いふ録をあみて吾翁の行状をあらはし我家の風雅をしめんとて

昔有婆子供養一庵主経二十年常令二八女子送飯
給侍一日令女子抱定曰正恁麼時如何主曰枯木倚
寒岩三冬無暖気女子挙似婆婆曰我二十年祇供養
得箇俗漢遂出焼却庵 茶話禅の果はなしといへるを

支考虚言談に死阿誰話とて追善集せる支考卒して門
人蓮二あつといへる是なり

やりねかし風やる二子のあり 支考

常に長刀のるたあ恵一か時
尾の声おほつかと何る里
山吹け春をりして青葉うの時
かや木のかりに雪の降なの
その果に差しても椿の時
世の中をとりもの皺や
肩衣ら おのくすし帆かけ舟
その庭の花うちふす 彼岸の車
横堅に織しせんとや 雪の糸
是迄ら しとく 春乃雪
外封切る廊下の口や氷さくら
すましさや風ふむやみの眼つむ
葉をおほしきるのいちくし小

四十の春を迎へて

菓ぬるく 死ねといふに 花の春
さくらさくひとよ 彼院の彼岸の時
侍ら眼さく まうけこうつう
恵心菜に奉つりて せてあしろ字

長刀の五條もすゝし橋の月

草鞋に梯あまた挿み陀に挿のまゝかけて十日斗ありて

なら山や雲井をのぼる霧の剣

神路や伊勢の山雲なる橋式にまうでやらんとてまかりて侍りけるに十四年ごとに六十の老を重ねてたびの方に福孫のおとゞにをとまさんと内外の御神に此心を祈り奉りて其の人くの別をさらへていへつゝと都をいはすや

鳥ニ譲ニ増賀夜ヲ

鶏一羽鏡に残し年こもり

花ニ感ニ西行時ヲ

花よそらく洞や幣にかしこまり

贈りて降せさんとさくら猪

しきならくそや猪のぬすみくひ

酢の香をも白酒売の名残かな

時る咲ぬ秋白し　紀然山

里の子に乞る掻る国ら乞ひつ筆

是信のくらみ三度の定ハ一本せよとまかりける左日の納涼に扇一本つけてせよとまかりける

かたひらの別ひらあし　鍰五石

粟の穂をこゑあぐる時や鳴うづら

何ならくかゆしあらく秋の風

かりまくら行京離るゝ小笠留

一霜の夜や芋のすんと菲

ひとつ家や一葉くれ秋乃霜

みそ拾ひ伸けるぬかし鶴の首

水仙やつゝと出れハ江の月

梅か枝の露に立よるをつ日の車　秋

鉢ひらき紙はかる小寺かな

ちりくりて春や牡丹の花の上

支考が武江を旅立けるに

言なれなみかとせ山さくら　分我

咲ぞの中をぬけ出る鹿つまけ　乙州

あしするる旅のおもや花ある　拙儀

西行聊餞別

世の又も精進の友よ海松（ミル）法雲（モツク）　許六

晋其角者武州江戸産也生医家不学医術終業俳諧
實井氏號狂而堂蕉門之一人而後起己一風著誹書數篇
姓榎本氏母方の姓によるか竹下東順か子也初名源助といひし時八神
田おたま池にすめり宝晋齋ハ米芾か硯に銘するの字なり
晋子螺舎雷柱子渋川有竹居狂雷堂狂而堂六病庵
善哉庵　宝永四年丙亥二月廿九日卒

類柑子　晋子終焉記

李白鯨に乗て汗漫の風にあそひしも酔中に月をとらへて哀しむ乃
氣を述ふるなり今や晋子三年の病根をも誹情に富て我をあ
らはし奇を吐頭をとき人口に膾炙する句々皆是なるものなり二月
三十日はしめもとの泉に帰る倦情よるなくてなすのうちの夢の淵
まさるに誹灯の光をおとしけるに余多の莫逆のちなみをなん此月
廿三日宝晋斎に膝をいるる友吟侶したりし

春吟栄妙堂の唫とも

草の暁　きえし　きりくれ　長角

寛の地虎　髭むすふ紙　、　青流
其草に香　請の川淀ふやらん　、　角
淡黄なる色のかほかれく　みつしも　青流
月も浮ぬひかり梅へさつしまよ　角
風のかけくる留の番よまる　流
馬の道丈夫の外に立やらて　角
涸るし　制をかへて　流
うすきの芽　水にあふれ九条郷　角

一声天の利に晋子ありなきけきまて別をぬ是を生おおさめの
吟なり今思ひあはすれは春典なかのひらゝ秋の氣を感し竜渓禅師
の九条郷の水雞に雨きこのあひし水中の天の一句古今符節の妙をつ
らく屋梁落月の光さしてる石友の貌をおもひおこすにさむれはなる
なり

　青流
きらくしと年　ちるもさくらかり　其角
芋の葉なり　余をつむ涼あれ

嵐雪者服部氏不知何許人業風雅遊武江戸蕉門之高弟也
後別妻出家
雪中庵玄峯居士　雪中庵の号は他よりよし
雪のうちの芭蕉いつくるかくちとつくるとも雪中庵の号を
加もあり宝永四年丙戌十月十三日卒歳五十四　駒込常驗寺葬

三夕の内定家

秋あはれ　定家の秋の夕ぐれ　嵐雪
杉風に星を紛するしぐれ哉
そ毋をとろのうる
五月雨や我ものもしや母恋

きりぎりす嵐の雪のこぼれ哉
軒の梅梅と輝くまぼろしの
樗佛てらさとめくーや芝者
はなをさ待くるあるまぬこそつくる事
つくるあるまぬこそ秋なるまぬ門のくろうの
星合や聞女も別ひの涙むむ
牛のよやかの床のすみもも
共寝の夢を悔
時へく者となりそしらぬ
あるおとやれ上ろう　花の山
石女の雛かーつくるあいれ
柳すらふでおのれ嵐の夕乙る
年ひとしさーうさーー日乃嵐
えれや晴て寄のかく
出代やおさみ仲ーりみあいを
ーくるの花のまうつきかう柳
桐柳氏ままやる葉めーー

華枝
鼻すりて
見ぬる

奇
かな

其角

自画自賛すれども下手なれば
手中独りて画をうつ

夕我嘉兒

我庵やぬすまれ青鬼灯
国見すと蛛つくろひぬ庵の門
ありけるものみえてあめの夕をか
黄菊まづさく其外の花もさく

辞世

一葉吐一葉ちる風の上

野坡ハ越之前刕人生ニ商家ニ居ス于武江戸ニ蕉門之学者也一遊ニ西海ニ不定ニ其ハ居所ヲ随テ師ニ得ニ炭俵之撰号ヲ
はじめ江戸に住ひのち浪花に住り標木社と号す後先師の
無名庵を高津にうつし高津野の翁と称せり死去の
年月をしらず蕉門の徒に附合の伴を待つるも此人を我と
まさるハなしとなり

はる草のまつ音かれしや朝鳥
かんのことのあまりあるを
はなくのからみおもくに
顔の出さぬ格子かな

あさがほにものくふしくれから
咲くみえのとらえの花
猫の恋初音に鳴てあかれなり
七草や雑ひなつけて切きざみ
鶯や門に来まして豆鼓
紫逸あらし白なりて花見の邪
鬼の月擂るると門を叩きけり
人声のおさまとまる宿の軍
秋もそや房に下る無ふ宿
ある人の別墅にいさなはれ終日あそびて
おかしく長夕つらに外の方をながめ出して
雲を遠ざかる　也有生

北枝者加刕金沢之人也業ニ磨工ニ見ニ蕉翁ニ好ニ風雅ニ北方之逸士也
立花氏にて金城の磨工牧童の弟也祖翁其謙を感じて和
方の逸士と号く俗姓三郎左衛門と云
卯辰集の序に
立花氏は枝を袖にして柱は栗の

雪中庵山風雪自画のうつし

笠翁自画自賛の写

こうらの箱ケ一窟のやどり

かの時

我家元

雪中

八徳乃海老

雪乃庵

笠翁画

名流写

こゝろあるとんくのころ〳〵せうもとゝあつゆく〳〵

四方ちりてまてるや春の花ごゝろ　小枝

まつのうめ松風ゆたく雲の上

楊柳や日らさしうつら夕霞

夕ぐれの鶯の声をきゝて

めぐる夜あらてゆくらめ立明け

渕や心はしりく四方の春

風流の出守なりけらん山桜

とまかくは胸ゝてうめ木の桜かな

牡丹咲て心をむかへ別さくり

淋しさや一天澄て行かゝる

さる竹がらたけりく宵の空の月

秋く蓑を送りて

白露もまことあはれみの行末も

秋あらは咲すゝくてる命みえ

み国の山ちるさか依ひまなく

善もて吹を吹つゝむもとを習ひなれ

揚柳や京の川ら玉の枝

涼菟者勢州山田ノ神職ノ人也葉ニ風雅ニ初號團友

号神風館蕉門ニ遊んで乙由と名を等し

山中の温泉にて

湯を抱て湯の月明さしき家

我身

秋風や息災ゐる身の人なり

冷まらぬ身をしれまく平

十月や降らぬ時雨と名をかへて

おもふことなくてあるむ神楽か

暮やる人は扇のお月の月

牡丹日やさまけらむ秋の風

見は富みて乙由ありて今年の春

市中やるよかけ曲くいつの頃

菜の花のあらしや庭に咲けば

鍬さけく叱るや桃の花

畑とて志賀の都の牡丹の花

一ひねり秋あらり　つぶみあり

涼莵

[illegible]

[illegible]

[illegible]

くくかめ花や池蛙よ陸る日
ゆくそなりけと印月乃別れこの秋
別るむよ推てんくる小庵この秋
花よ世ているるるとるの蛙
時るるゆやちつこに昔の著
ちく考錢別
天遂ん花るるも姫見坂
芝著ゆはめて逢へる時
東そそるなてる本の榕こる
小春よ蔭のくくくらのむ　花

雲鈴者奥列南部之人産武壮年入道自號摩詰庵婆旦人風雅師東花坊一渡佐渡島著入日記

雲鈴法師行状記

其傳よつふ雲嶺法師ハ考つくと成て奥加南部の産るく
なるるの侍郎るるの壓よ世をいくい捨る武陸の

雷程るる風るるひ中るる湖東の五老井よ社をむすふ侍るもあるく
侍るるあるひ酒をるみて色をぬるまざるハ較沢の隠者よ似れと
るる年ふく西るるるふあハ彼歓中の謫仙よやと其ころの人るたるふ
北会ね中岩亨保のはめつるる越後の生雲崎よ草庵をむすひ
るる白の老を養ふへきに高田直江の風雅をあるるひ柏寄よさ
まるひ所浮よ拾ひるる氣カまるくくよ色るるる酒よ世界をえ
やるるて果るるるのるるるひを立て世るはるるるるかるるとかるる
らんることのるるくくきくくるるるかるるひ棉やるの物をさくせて二月二日
のるるよ鬢るるるるる改てるるるくくるるるるるるるる
へき坂あるると例の我るるるくくるる強て移るる猿籍るる中年
我るくくひ槌よへて一生の親法をるけくくるふ面我息のるるなん
のるるるるるかるるるるひのるるるひ立へきるるニッるかるて其我のほ
ヲ

辞世　お代るるあの世るる二月二日るふ

るるるる一望のくくハるるるるるるる

らよりて移るるかなくて下界
は辞世よ由説あり人百八
世代よりや浄土の人まつ
象日記云
水波与雲鈴法師茶挽与陸風と定て者与尚雪青橘の二老人ある
しら高堂にあるあり我まるあるあり共のてかんやあ
回日記よ考与高めるまるとつるそう
雲鈴よ世営をりて餅とやき茶と黄つ色し
葉鍋おるまるとるやきうしは　雲鈴
雲鈴藏法師餅別
ちるる焼て行人ありやなの樽　許六

吾仲者洛陽人也居于六條一葉佛画好風雅師李由號柳後
園著柿表紙三卷一
馬戈人　百阿佛

文操　柳後園序　馬戈人
柳乃雨のおるるるはて　るるる心のかとうるやら
花のさくるる花のおるるる　此画のるるるあすや
七夕賦和讃三首　る阿佛
星の部ひるる天の門よ世をかるるるあの笠の橋共曉をおりるるるかる
姫とる者つけるる　星のやるるる玉のするるる青丹よし
其るるるるる仙るるいたきるけ姫と八者つけるる　星る部るるるる
一年るの秋の袖きるる涙るるきるる去るる嘉の朝部姫と八者つけるる
わるけや去るるる声のなるる貴
六條の豆越の法法や歌乃雪
わるけを嗅出まるる　月の岩
五月雨や風つるて来て戸を叩
ある智恵のあるて咲るけるの花

路通者不知何許人不詳其姓名一見蕉翁聽風雅其
性不實輕薄而長違師命一甄泊之中著俳諧之書

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

其十　一水一月千水千月と云るもすがて
我身ひとつのわを問
袖よつまに残る哀　月いろつ

其十一　答
月ひとつの柳　毎年ある木のるまう

其十二　寄芭蕉翁
[illegible]

樂器画　採雪筆

尤太鼓

青海や　古鼓ゆるみて　春の声　素堂

中琴や　[illegible]の塵　芭蕉
花の笙
右笙　[illegible]の笙の色　其角

嵐蘭者不知何詩人松倉氏業武奉仕板倉家奉諫速辞官
[illegible]毎隙于武蔵草蕉門之老翁也為月遊于鎌倉病死
俗姓松倉又五郎　江戸谷中臨松寺墓あり

道灌山よりの眺
道灌や　花と其代を嵐　こゝ　完業
初市や　雪よ漕まる葉　那
水仙や　[illegible]　[illegible]
素堂の蓮池辺
白雨や　蓮　一枚の葉あるま
笠ふる　[illegible]　仰ぐ木　槿
更衣　[illegible]
二ヶ月の扇を[illegible]暑一つ
[illegible]つきやあるる　[illegible]　[illegible]

郭公書林の葉かくれし　や
梨花を色おの林のあるよせて
梨花を人目をうらみ　林を
仙洞の花見のつゝやまむとう
青柳よりつゝく移る　塩に
炭をさむ青さ　水る　春年　うみ
くひものよ家入や　つゝ　花見の郎
移るよ　ふんゝ　ヲ　や　川　寸
盃顔よ　世のこゝ　や　蓼の乃　塩
浮沢をうなきの　濁す　沢思ト

荊口者濃州大垣之武士也宮崎氏蕉門故老之士也此節
千川文鳥　三士之父也後致仕改名東宇

四五ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ
ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ
ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ
ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ
ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ
ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ
ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ
ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ
ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ
ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ
ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ
ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ
ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ
ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ
ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ
ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ
ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ
ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ
ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ
ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ
ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ
ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ
ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ
ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ
ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ

牛のよりの角や待ちんとさまれ
梅の花やまゝひをむの紅ちら
白雨の葉や思ふかうの青ゝ　俤め
もゝくさよ青のやかの青ゝ　屋
代士のうるとゝるとゝ

去来者肥前之産也後隨兄居于洛陽向井氏也中華蕉
門之高弟也號落柿舍隨師選猿蓑後病死年五十三

向井去勝老人の末のまゝつくゝの方よ生ゝ俗姓平治郎治の
長者町よまゝ後よ嵯峨の落柿舍ゝ寶永九甲申九月卒

外さゝ青や　ゝ　夕さゝ　去来
をゝいらあの　雑　つ　花　盛
甲陽軍　鑑をよむ
あゝ蓍　蓍の　志ゝの武　ゝ
池の　ゝ雲の　ゝ　あゝ
ゝ　柳の　木の月　祝ゝむ　賣　ゝ　蕨

蕃匠の人々は俳諧のかなき事かゝ入るゝと定るもの
野路やら雪を捨て十五年
鷹〳〵しいへと鳴く雲の門
ちるゝる年を別の音ちるる
えるや春よりのちの第七
山里の秋を盛ゆく くるひろ
秋寒してをいろきの野を
をゝるゝるよ堅ら畑の麦 ぬるむ
言潮や活ようくして 梅花
降ることあつまる屋よ 活の蝶
ひかりかゝりて 麦かなる

遠女ときはるまるうをいるを又遠ゆる人
高ゝうゝ世の外の春ゆけり
誰くも東むくらん月のれ
嵯峨よりわるつをあるつ休息仕いなれハ
月〳〵青 我里人の菜くゝん
長きあゝ 旅草 ゆよ春ゆゝ
年の春ゆ ゆくるゝ の十年

去来ゝ紙のゝつゝく
須日土芳 草製 俳中 近ゝ若ゝ百 紙 失念 故今日一
人ゝ去ゝ土ゝ芳ゝ去ゝ山ゝ面ゝ 来山使 是ゝ舞 台 陳 隨ゝ山自
形ゝ書一 年 存ゝ号 あ 雖 失ゝ 数 山 ゝ 遠 亡 ゝ 一七日 於
山霊 前 山 追 善ゝ 百 韻 首 尾 続 無 行ゝ お 来 行 義 備 足 仕ゝ
先ゝ其 帝ゝ山 傳 来ゝ 鳥 羽ゝ 文 墓ゝ を 立 中 山 ゝ 文 墓ゝ る 八 ゝ 字

及もひま乎吟老人より亡師へ伝ふる風雅傳来と雅物に出ル
根元云有法師より紹巴へ伝ふ紹貞徳季吟亡師へ伝ふ如
斯と重篇へ伝ふ亡師一代手常と側席へ伝ふ用も亡師深
川へ草庵と兼ひ近ひ志るに先年猿蓑撰成仕吟声と
砂原川より取まとめ相成其侭義仲寺へ送り亡師へ
出門人へ中へ伝ふ成に心ゑつけ亡師へ一代此側侍と
ゑ花枝茶侍ゑ金着なさるに八委ゑ全然隠逸
禅中風雲へ行状へ伝不傳へ不ル八ゑ侍此後八其物
にて八微不中此度此侍へ折拾ひ一通立不中ル芭蕉門
理ひゑなひ幸ひ此節其角ゑ来ル成ル江戸其角常雪
へて八左右へ出ると思ふ此ゑ二の出発ゑ夫故出発ゑて
右文蕉議へゑ中間ひ其角頼へ旋退ゑ一ゑ出ゑ
中ひ許ゑ病ゑ木節へ老衰美濃尾張八遠方ゑ届不中外
へ八ゑ車へ者年成一先右文蕉へ義仲寺真愚上人へ預ケ置一
二年ゑ迄ひゑ年の者ゑ拔群へ考ゑ出来可中上人へ中ゑ

へ路傍へ墨寺風ゑ又八紙雑へ取れ貧地獄屋敷不仕心庵へ
中ひ此ニゑ分へ出ゑて八へ預ケ置ゑ者ゑ月へ道心へ人伴ひ
ゑ免角ゑ入節へ者へ此上へ右へ雅物ひ家貴方へ形へ置
ゑ来春へ成ひ拾者ひ系へ趣使ゑて仕ひ則左へ思ひ者ゑ
持せ遣ひ諸ゑ出賢ゑへ上

十月九ゑ　　杉尾ゑ出ル　　加井左衛

貴報拝續先ひ此ゑ之ゑ成ゑ出ル不仕重ゑ出方ひ成ゑ不ル
然ゑ為頂へ文蕉へゑ伴ゑ付ゑ遠一ゑ兼知仕ひ如貴今ゑ右文蕉へ
ゑ八日ゑ亡寺ゑ来ゑ兼へ到ゑ大切ゑ雅笠へ出ゑ田右へ笠物引
議へゑ出心配へ成ひ花ゑ方へ奉ゑひ志ゑに其角ゑ来ひ弟へ兼
合ゑ出ゑ辞退へ成ゑ表ゑ不兼知ゑひ芭蕉門人へ其角宗雪
へゑ八日ゑ伴物好ひ者不ゑ者へ出ゑ成ゑ門人中へ伴ゑ
遣ゑへ出人ゑ成ゑ中ゑ右へ伴ゑ拾者ゑ出ル形ゑ弟
ひゑ成ゑ伴へ弟へゑ中ゑ成ゑ不能其義ひ且又真愚上人

四位等之義を以たるに事柄又拙者方へ贈り物須ヶ子成者
太り繁多の内多くは俗世界之信士と成り風流中之形物
志ゝ成ゝ共領り此境界へ来り何かゝ共雅物と成ゝ共貴
雅方へ成者多の内此頃ヶ子成作ゝ通り春ゝ成り拙者成越し
羽西へ上発も角も仕兼く議方を以ゝ季吟ゝ来り
存生ゝ成ゝ共ゝ通ゝ上納仕ゝ成ゝ共又追貴雅方へ
此領ゝ乗ゝ成ゝ此俳ゝ成ゝ芭蕉魂ゝ成ゝ為備之ゝ
年歳土芳より好来ゝ義ゝ忍ゝ偉ゝ

十月廿九　白井吉来

松尾宗房
命清判

鳥羽文蛩一脚　黒漆　長一尺九寸　幅一尺二寸　高四寸
板厚三歩　筆る一尺一寸

右ゝ此俳相義ゝ此季吟翁ゝ先此相義ゝ成此重器此
今度拙者ゝ此領ヶ子成者ゝ成ゝ成ゝ此後此件

元禄七年甲戌十一月廿日　白井吉来

松尾宗房

但三ヶ底　二ヶ所ハ小指ゝ生程一ヶ子ハ小き板成
四方角摘ゝ成　此文蛩今長書ゝ有

万子者加州金澤之武士也生駒氏號此君庵蕉門之英士也
此君庵水國館ゝ其地ハ井林ゝ河水をめぐりて屋敷をかまへ
ゝゝ屋敷とも成ゝ餞ゝいひ系序を此君庵とつく

山月やかつぬ酔て夕附板　万子
かつぬ死ゝ成ハ井の上ゝ梅の花
岩根ふみしめくやゝ梅
蕚苔の名のくめるもあはれ
陳ゝ成ゝ男牛の移舟の外
おもふ人の為ゝ新の歌かく扇の事
一ゝせや候つく白のまゝ成
花芒雅ゝ成ゝ成てくゝ成ゝ

夢為者加列大聖寺武士也河地氏蕉門之英士也病死

木導者江列亀城之武士也直江氏自號阿山人蕉門之英士也

卯翁称二高異逸物一

春雨や　書の中　かく　水の音　木導

（此句略ハ上の五言姉川やと冠しら百秀ぶやと）

あるまれの　書某つむ　義をふう　那

蹴すくふ　ふるふ　戸の　押画　かくや　水仙花

干魚よく　ふくさうし　ふ　那

冬ごもり　朝の　筒の　ふ　うう　一角

冬の月　杉を　洗ふ　あらし　外

鼠　ふ　ふ　さらの　音乃　宣　一角

瞬　ハ　ふ　何と　叩く　鉢　き

やふ入の　書の　ふう　ふ　の　巻

ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　柳の　杉の　那

きすまる　夫　物を　ひ　ふ　那　杉　外

大弁の　月　ふ　ふ　ふ　ふ

[illegible]

許六

[illegible]

汶村者江州亀城之武士也松井氏字八師薑號九花亭

蕉門之達士也嘗テ能書画繪ヘ師トス五老井ヲ

二ツ月の雨ふりそめし柳かな　汶村

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

程己者近江亀城之武士朝倉氏号白日堂愛蕉門之風雅

狼の道をつたふ高雲の外
滝つかを聴て元るる小路の中
傾城よくしつうしくる絵の中
埒明るや主用の中の童使哉
沼壁を行とくるうを秋の風
臥病する八専中や牡の花

朱廸者江陽彦城之武士也寺島氏号白露蓋年久し好風雅而入蕉門病死し年四十二

一ちきりやかくるる神無月　朱廸
塀くらうの桐の枯や冬の月
[illegible]
[illegible]
[illegible]

百仲俗姓五助 初 金平又兵助 三百石を領す
正徳五乙未年八月廿六日卒 系譜八巻戸辞アリ
法名 五老井無無道無居士菊阿佛

終焉之偈

一時ニ打破ス屎糞ハ壺芳芳臭氣供ニ梵天
十年死ノ中ニ活ル 屋上ノ屋

五老井百年忌彦根の郷土元川と云る人つゝけ
文化十一年 集冊ヲ以テ其序の文ヨリ

百年の後人ヨ傳ラ〳〵凡俗諸の語ヲ一世の塵埃ヨリ拭ヒ
〳〵文章ヲ百代の西庄ヨリ遠ク流ル 許六蕉門通流の
ひとりにして鉄心石肝の氣ヲ吐ク〳〵天下の俗士ヲさとし文章
に学ヲ樹ス既ニ家職後往来問答ヲ普ク諸生の速ヲ時さ
しめのひとりの西ヨリ百年の長ヨリ遠ク深の山ヨリ傳る駅の東の四庵
を笑わんと其遺稿を高ノ〳〵かゝり〳〵水路の俗戸を叩くは
〳〵東西南北ヨリ傳ひ来る諸好士ヲさそ〳〵ひるものあつる

あつまる粒ひとなり〳〵懐四の膳を干る者半百の莚ヨあつめ
さい彼酸吸の三翁を河の方ヨリのそむとあゝは今此節ヨリ
アそのあつまる〳〵比ヲ文化十一戌申年の花盛る日五老 井隠
さいく万年ヨとあさるるを祈り不紹武川の書種ヲ〳〵
さ〳〵東ヲ江の笹根河〳〵ヨと指て〳〵題をさて井さ〳〵
となつくるあつまるし 元川述
菊阿全集其外諸ヨリかしらの花やと〳〵男 許六
真白ヨリ如 根
春ヲ立や岩東ヨ〳〵ヨる神矢
餅ヲ〳〵の喉の廣さや山代の春
四方ヨ〳〵扶ヲ〳〵ヨ今朝の春
水上の滝つよ〳〵や 橋そ先
元朝やそ〳〵〳〵て 何小紋
脇さ〳〵と撰ヨ〳〵て難者ヨ〳〵
蝦の蔓ヨこゝ〳〵
えりや 板 金谷 山人 日

四方山まうで声々のくるしし年男
[illegible]
[illegible]式部の笹ちまき我こそ五月の声をきけ
[illegible]春をまつ
源氏なる稚子花の春なれや
二条の河原を戦くる四度の節句
高砂又ひのくさじや諸てや摘る草
堺川の鶯は荷てや摘る草
[illegible]やあるまつ木蔭
[illegible]の年也きし陰い春
草[illegible]の[illegible]精迫乃[illegible]
芹焼やあるの沢[illegible]の形
摺子木なる[illegible]の[illegible]
買立乃足弱乃[illegible]や春の雪
ひしけなる菜園の上やくるみ色
[illegible]の笠を出てうんむ春の色
節人やみをみ子をみて春の雪
二月十三日迫暮
節小袖十三年の春をこの郭
春[illegible]や湯女のくるる[illegible]て蕨む

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いろはまつ　あけくれ　二階の雛やうの花
ゆとりて　娘の夏や　雛節句
あらはれし　箔のしゑやや　女新
　　亜達ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

色花ぬいる孫や　女雛
乳母いまゝ今の中や　雛おき
春ゝ　ふるんの旅や　女雛
清瀧島　汐干　くゝて　三日の月
出雲や　給仕ふゝて　いる五七
世代やいさゝひゝ　石清水
すかゝるや　系吹れ　ゝをこ足
出　代やるの　御ゝ　山乳の人
出　代や　静ゝ　あく　むさ場
出雲や　山寺の　好きの　彩　提灯
出かゝるや　豆めし　門の元　日和

こゝろゝゝや　出雲ゝ　門の店さゝ
目ゝ　ゝる　ゝ　ゝ　賤ゝ　重ゝ　ゝ
雛ゝ　家の　鐘の　ゝ　ゝ　花ゝ
振ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
鶯ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
たゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

草ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　他の
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　牡丹と
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　

[illegible]
清水の上にて　春の月
山伏のしたりつるやしさにて
寺庭にうゑかけてめきて　かけにて　搖る
蛇のきぬ
和漢の事にて
[illegible]
苗代の水よ　敷にて　さくらの枝
須磨の[illegible]
石
山のさくらを　[illegible]
[illegible]
大和[illegible]
油
[illegible]
[illegible]
[illegible]

青麦よ青くなりて麦の波銀の如
石佛一鎖の重々のはしめこそ
井のくるとと夢て毎日の精進日
什の蛍のさんめを時や時なる
御手洗にうすくや部屋
搗初の屋の竜さや五月雨
陸奥の屋の簡りや水の白
ふるさとの麦の穂ふや四季の色
氏のまよ坊のもるや土用干
和尚の寝ノ寝ととしする東屋
扇の音や古歌 稽の寝ぬに
さ俳の波の寄むや麦の屋花川
里の面や麦の穂あるるる音
うす部ふ附木の匂ひや麦の秋
寂ノくさ寝系なるまの秋
うさつまの世の命なる 牡丹
春もてる春よけり 白牡丹

井のくるとと対なるくるとし 根生稲
時なるくるくや四くるの屋の立
鈴田夕田豆田又田やあぜ
腸立の佛おきくや 時多
田ふるめの麦くぬ元や 牡丹
亡掛て寄そて待そ麦本
ちつくや新学院乃ほ麦
白川を取舟や系ひ麦本
紀のむ乃寄甘なくや 時多
下系ふて大くきくや 部ふ
猿よりそおそ乃ほ麦
まつ鳴や東坂ふ麦牛 時多
みーふ取そるのむこさ世や芥よの麦
みーふ取そなれば取食らく世のの
まめーの麦のるるのの取ふ麦の
五老麦ようつて
牛宅のあやめ麦の雲ふの

あやめふく女房のあるじかな
あやめふく粽の香の手つくし
[illegible]の葉や粽の葉ずし
立さくちまきの中やたなれる
さみだれのかるや[illegible]
[illegible]天象[illegible]
さみだれや[illegible]
鉦の緒の[illegible]
天蓋々誰[illegible]
青瓜の[illegible]

病中吟

紫蘇の葉や土用のうらをむしかる
何ぞせん[illegible]
夏籠の留主をかくや[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

大佛の屋の[illegible]
[illegible]
八幡[illegible]
[illegible]
[illegible]

あつめをして奈良へくだる　素盞嗚

隆忠大納言ハあるひは肥ふくるゝ角出仕
をとゝのへられ九郎ゆゑ宇治の橋姫よこゝろ往
来の物語をきゝ宇治拾遺こゝろ

真栗くゝ　肥る人の　九郎
押くゝして　風くゝ　顔や　牧屋の祐

世くの　夜ゆハくゝ　この風くゝ　千西風くゝ
畳敷の　星くゝ　ありくゝ　ところてん

悼の声　ゆゆくして　浮くゝ　ゆゆ

相の　笛よ　笛よくゝ　ゆゆの声

信濃坂や　堀を吸くゝ　疫病神

五老井の　彦くゝ　彦根の　地よくゝ

天井くゝ　井の　ゆて　すくゝ　ゆ　ゆ

くくん　ゆくくり　ゆて　暑　ゆ

狗漬の　風よ　碎くる　あつくゝ

大本を　伝めて　ゆくゝ　下　ゆ

六月の　句作なり　や　食の　紙

色うせむ　袖を　夏　ゆ　ゆ

あつい　ゆ　ゆ　ゆ

風呂の　井　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

亟遊の　餓別

空　や　花の　ゆ　ゆ　ゆ

夕　暮の　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

須田町の　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

新らたを　なつめて　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

上弦の　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

七夕や　平仲　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

七つ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

海と　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

角と　陣の　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

星会を　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

浮世会や　日　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

天文者の　天　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

まる題や　引　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

[illegible]や[illegible]なる[illegible]天の門
油乃せめる星の光や　銀河
地なるひるの糸や四絡の玉まつり
百霊なる落雷ひとつ　かけ絶絃
精霊のふるふるあるまま　柳　苔多
精霊あしをかれて旅寝の夕
金ふる紙ふるまるまつり　むまつり
深まるる帳子唐長や　墓行燈
夕めしるる魚のいそぎや　墨
やふ入るるて来のそそうふみ
送るる夜の麻木ふるおそそふ
下草ふるるるるるる来角力
角力角の[illegible]ふる　秋　裕
十六夜や　おくれて　遠ゐる　豹　迫
新蕎麦の信濃そば　中　豹　迫
蕎麦の七尾聖ふふふ　豹　乃　張

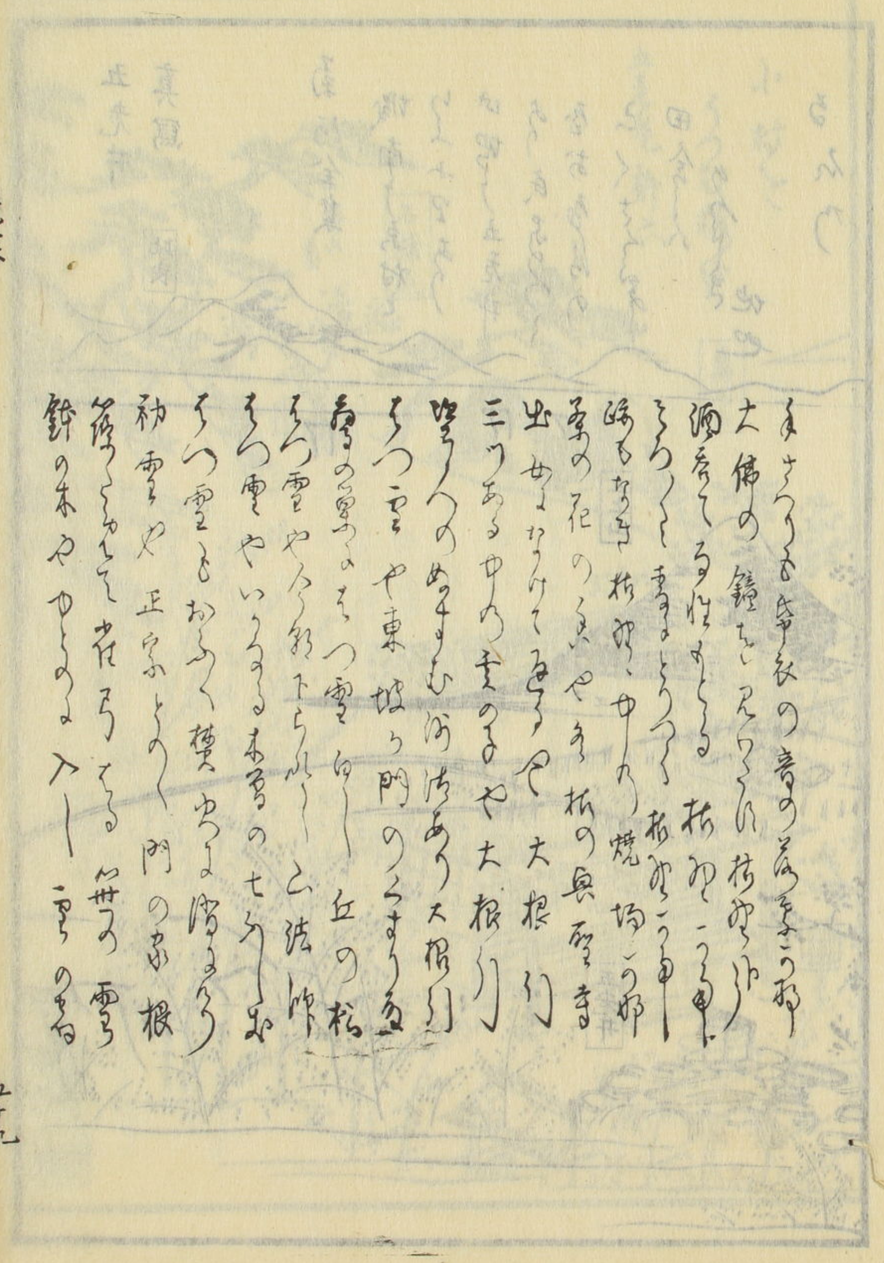
[illegible]古代の無ふを[illegible]
[illegible]を水草清お[illegible]
[illegible]
平　[illegible]の[illegible]　豹　迫
[illegible]つまや　[illegible]　や　大[illegible]の[illegible]の上
[illegible]の[illegible]　[illegible]
大石地[illegible]
現う[illegible]
代　[illegible]　[illegible]
業[illegible]
[illegible]田の[illegible]
[illegible]や　[illegible]
七月や　地獄の[illegible]　秋の[illegible]
七月やまつ[illegible]の穂よ　秋の[illegible]
市中や土用をめけて秋の[illegible]
乃川菊　[illegible]
[illegible]　鉢や　[illegible]
きさまして　[illegible]
鬼灯の種よ　[illegible]
きりぎりす　[illegible]　[illegible]　張

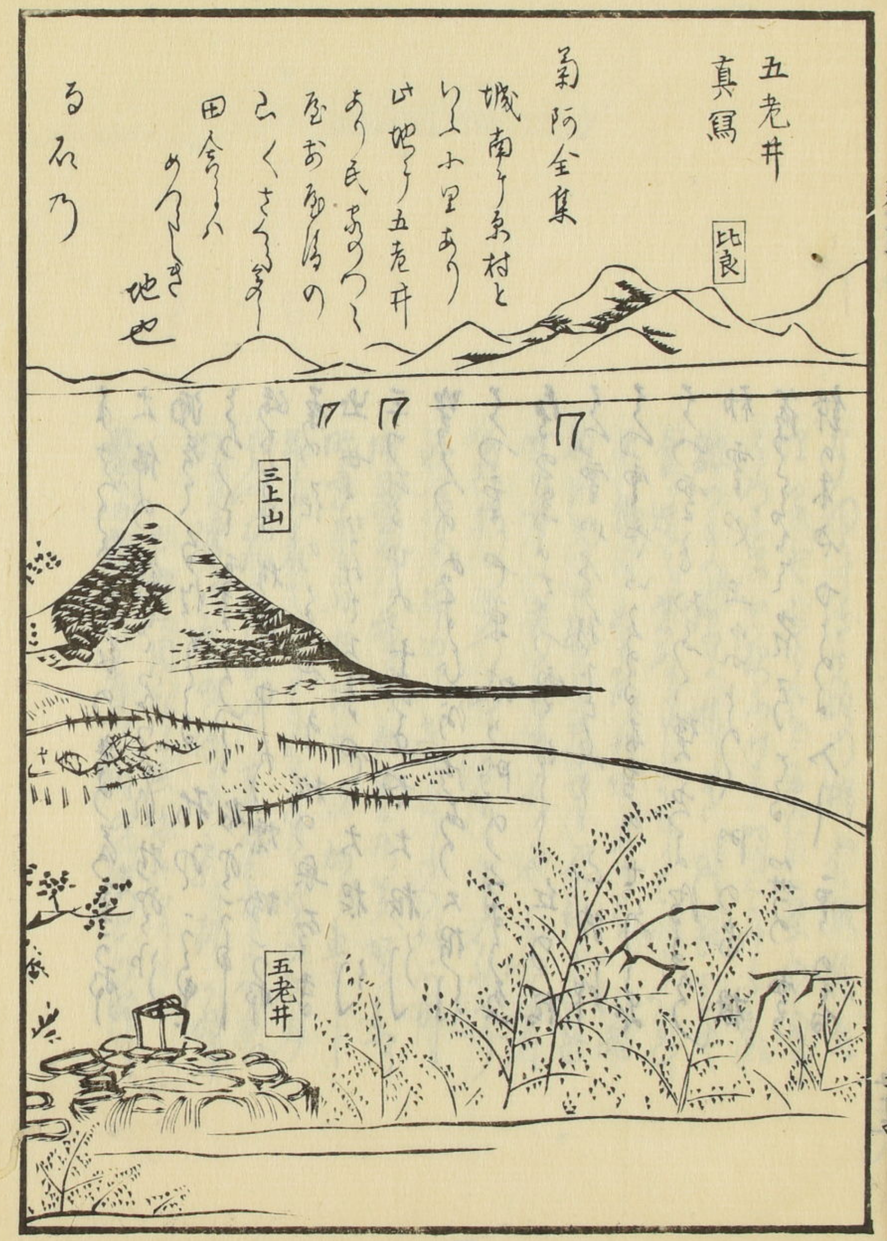
[illegible]千鳥の眼へかむくるいとゝの郭
[illegible]おもやいろゝまきくむしの声
[illegible]むしの哭や大根食の柔硯五器
八郎の節句なるやたのゝ沙
西風のと生と鮮なり十五日
[illegible]日や日ぞまるる三保の海
[illegible]日や幾百の岳も移り
芋と言る鍋の中迄月却
芋のよろこの有日と移ろこの
[illegible]唐の志紙して月入り
[illegible]の市始長浜の月入り却
[illegible]日や玉侍の至賓去
[illegible]琴琴をかくて月入り
[illegible]やめうゝくゝの月
[illegible]日の二見浦

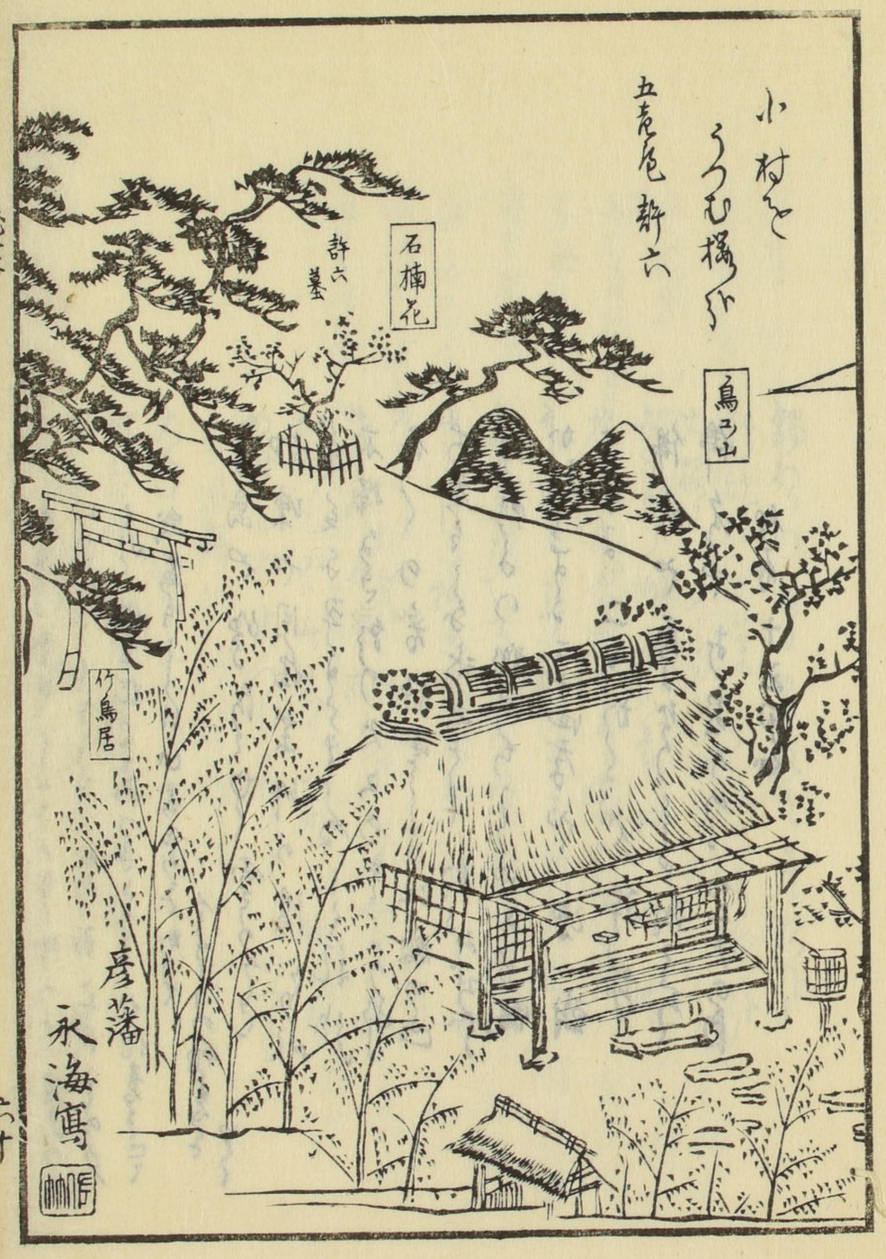
[illegible]の命上の演物
[illegible]日や赤徳の[illegible]
[illegible]日や京色の芋子雨の[illegible]
[illegible]東堤の八景浦の月
[illegible]日や[illegible]
一天雲[illegible]晴るを[illegible]
明日や一声くゝる天は雲
くゝ[illegible]の月却や浦[illegible]
時雨[illegible]
浦部の芒[illegible]月
[illegible]会せん日の暮も外の浦
[illegible]入り三日の月
酸の[illegible]頭[illegible]
[illegible]
所[illegible]の[illegible]
[illegible]門[illegible]鎖[illegible]

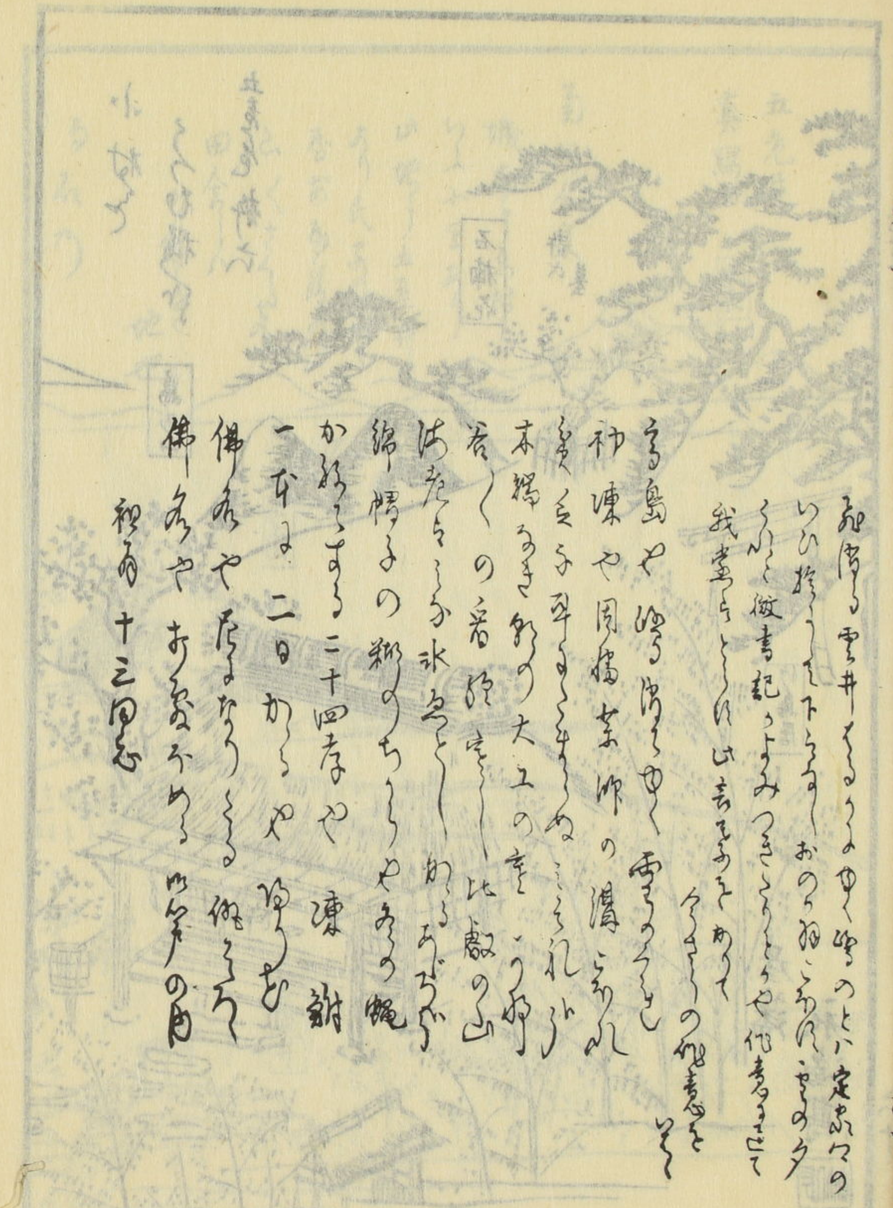
場主みよ　おそ春の雨のまつ
りうるや　八ヶ岳の　水かな
熟りるや　夕顔の　めしつも
夕顔の　白をうらはさる　夏の麻　や　芒原
小男鹿　やうひおうる　寄る細
ゆるるる　うかめ　みうの　麻の声
辻戸も　ちやあ　西瓜　細の　ひらう
ちやあ　寄ちをこうい　ゆらう
一番と　寄ちをこうい　ゆらう
西かて　ちの　根へ　ゆらう
花いろの　きらつく　袖や　今夕の　雨
高原の　加賀　ちく人　音信よ
きくのるい　や　姫人　お寄の　ちり
四代　や　芋の　細の　中の　宮　日和
秋もと　や　宮よ　けり　ちつ　おそ
ちつ　や　夏の　竜田　ちぬ　おそ

草物や　やはらて　信よ　秋ちき
立花井草物
松茸　や　ちうちう　ちく　ちく　花
ちんこは　や　種ちく　ちぬ　草の　竜
ちんこは　や　ちきち　ちて　四代の　民
思遊　遊　遊　飯　列
新芋　芋の　ちぬ　野の　草　豊ちき　ち
ちんこは　ちこ　ちぬ　都の　ちつ
四遊　ちき　遊　大工の　おち　ちつ
遊　ちく　ちく　ちふ　高　や　秋の　ち
三井ちや　ちや　ちち　三　神の　神　寺日
行ち　雪　雪　ちす　め　入ち　る　十　秋　ち　和
下京の　ち　の　ち　ち　遊　十　秋　う　車
刀さし　紐と　ちち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち
高仕事　ちかの　ちよ　ちる　ち　ち　日　ち　橋
橋の　ちち　三代　四代　ち　ち　ち　ち　ち
我組　ち　ち　職　ち　の　ち　ち




五老井
真寫
菊阿全集
城南ヶ原村と
りよ小里あり
山地ヶ五老井
より民あつつ
をおあ多ゆの
ふくさくゆ
田舎ゆ
ゆうしき地也
るゐ乃
比良
三上山
五老井


小村と
うむ揚ゆ
五老尾新六
鳥ヶ山
石楠花
許六墓
竹鳥居
彦藩
永海寫



和倉の雪井くるうよゆく雪のとハ定あてのいひ捨うたとうすおのゝおこゝろ夕ふ〳〵ふ〳〵微書紀うよみつきゝゝゝや仏者ゝゝて我者ゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

風俗文選大註解卷之壹上尾

蓮立義板